

書評

北野秋男編著

『戦後学力テスト研究資料集（第1巻～第6巻）』（クロス・カルチャー出版）
の学術的意義について

町山 太郎

（玉川大学非常勤講師 他）

はじめに

北野秋男編著『戦後学力テスト研究資料集』第1巻～第6巻は、戦後日本において各地域で開発・実施された学力テスト関係資料を収集・整理し、その歴史的展開を明らかにするための研究基盤を提示した資料集である。本資料集の学術的意義は、単に散在していた学力テスト関係資料を復刻・集成したことにとどまらない。戦後日本において「学力」がどのように捉えられ、それを何によって測定しようとしたのか、さらに測定結果が教育行政や学校教育の改善とどのような関係をもっていたのかを、地域に残された具体的な資料から再検討できるようにした点にある。

編著者による各巻の解題が繰り返し示すのは、従来の研究が全国規模の学力テスト、とりわけ全国学力調査等に関心を集中させてきた一方、都道府県、教育委員会、教育研究所、大学、学校等によって独自に開発・実施された学力テストについては、その全体像が十分に明らかにされてこなかったという問題意識である。本資料集は、この研究上の空白を埋めることを目指している。

したがって、本資料集を評価する際には、収録された個々のテストの珍しさだけではなく、戦後学力テスト史の見方そのものをどのように拡張したのかを問う必要がある。本稿では、第一に「全国」から「地域」への研究視角の拡張、第二に「学力」概念の歴史性、第三に学力測定と教育改善との関係、第四に地域間比較の可能性、第五に一次資料の保存と研究基盤形成、第六に各巻の解題が示す地域的多様性、という観点から本資料集の学術的意義を検討する。あわせて、本資料集によって開かれる今後の研究課題についても考察したい。

1. 戦後学力テスト研究を「全国」から「地域」へと拡張した意義

本資料集の第一の意義は、戦後学力テスト研究の対象を全国規模の調査から地方における多様な実践へと広げたことである。

戦後の学力問題を考察する場合、文部省等による全国的な学力調査は当然ながら重要な研究対象となる。しかし、全国規模の調査だけを中心に歴史を描けば、学力評価の制度や技術は中央で形成され、それが地方へ普及していったかのような理解に傾きやすい。本資料集に収録された各地域の資料は、そのような単線の理解では捉えられない戦後教育の姿を示している。

各巻の解題からは、教育委員会、教育研究所、大学研究者、学校教員など、多様な主体が学力テストの開発と実施に関わっていたことが確認できる。また、開始時期、実施目的、対象学年、教科、問題形式、結果の利用方法も地域によって様ではない。児童・生徒の学力の実態把握を主眼とするもの、教育課程や授業改善のための診断資料を得ようとするもの、標準化された検査の作成を目指すものなど、同じ「学力テスト」の名称の下にも多様な目的と実践が存在した。

第1巻の北海道・東北編では、青森県や秋田県などにおける戦後早期からの学力テストの開発・実施が検討される一方、各県の資料の残存状況や実施形態には差があることが示される。関東編でも、県教育研究所や教育委員会が関与した標準学力検査、学力調査等が取り上げられ、地域ごとに異なる展開が確認される。北信越・東海編、関西編、中国・四国編においても同様に、各地域の教育課題と研究組織のあり方を背景として、多様なテストが形成されている。

このことは、戦後日本の学力テスト史を「中央から地方へ」という一方向の普及史としてではなく、全国的な政策・研究動向と地域固有の教育課題とが相互に作用する複線的な歴史として捉える必要があることを示す。その意味で、本資料集は戦後教育史に「地域」という分析視角を明確に導入し、既存の学力テスト史を補足するだけでなく、その歴史像を再構成する可能性を提示したものと評価できる。

2. 「学力とは何か」という問いを歴史化する資料

第二の意義は、「学力」という概念を自明のものとせず、歴史的に形成されてきた概念として検討するための資料を提供したことである。

今日、「学力」という言葉は教育政策や学校教育の中で日常的に使用される。しかし、何を学力と考えるのか、何を測定対象とするのか、どのような方法によって測定するのかは、時代の教育観、学習観、評価観によって変化する。学力テストは、こうした学力観を具体的な問題と測定手続に変換したものである。

本資料集の解題では、学力テストを広義に捉えつつ、「標準学力検査」「学力調査」「診断テスト」「分析テスト」など、性格を異にするテストが区別されている。標準化を志向する検査と、学習上の弱点を把握し指導改善に結びつけようとする診断的なテストとでは、同じ得点を扱うとしても、その目的は異なる。名称や形式の違いは単なる技術的差異ではなく、「何を学力として把握するのか」「測定結果を何のために用いるのか」という教育評価思想の違いを反映している。

さらに、戦後初期には米国の教育測定論の影響を受けた客観的・標準的な測定技術が導入され、それが各地域の教育研究の中で受容され、修正され、独自の形へ展開していったことも読み取れる。学力テストは、単に児童・生徒の能力を外部から測る装置ではなく、戦後日本の教育関係者が「望ましい学力」をどのように構想したかを示す歴史資料なのである。

したがって、本資料集によって可能になるのは、「戦後日本の児童・生徒の学力はどの程度であったのか」という量的な問いだけではない。「戦後日本では、そもそも何を学力とみなし、それをどのように可視化しようとしたのか」という教育史・教育思想史的な問いである。この点に、本資料集がテスト問題の復刻を超えた価値をもつ理由がある。

3. 学力測定と教育改善との関係を明らかにする意義

第三の意義は、学力テストを単なる測定手段としてではなく、教育改善との関係から検討できるようにした点である。

各巻の解題では、学力テストの結果が、児童・生徒の順位づけや学校間比較だけではなく、学習上の問題点の把握、教育課程の検討、授業方法の改善等に利用された事例が取り上げられている。学力の実態を把握し、どの内容でつまづいているのかを分析し、その結果を教育実践へ還元するという考え方である。

この場合、学力テストは「測るためのテスト」であると同時に、「教育を改善するためのテスト」である。特に、標準学力検査や診断的テストの開発過程を追うことによって、測定技術が学校教育の改善という実践的課題と結びついていたことが分かる。

この視点は、現代の教育評価を考える上でも重要である。今日の学力調査においても、結果を単に数値として公表するのではなく、学校や教育委員会が授業改善や教育施策の改善に活用することが重視されている。しかし、「調査結果を教育改善につなげる」という発想は近年になって突然生まれたものではない。本資料集は、その歴史的系譜を戦後初期からたどる材料を提供する。

一方で、テストが教育改善を目的としていたという理念と、実際に学校現場でどのように活用されたかは区別して検討する必要がある。この点は本資料集を基礎として今後さらに追究されるべき課題でもある。報告書に記された目的だけでなく、教師が結果をどのように受け止め、授業や教育課程をどのように変えたのかを明らかにすることによって、戦後の教育評価の実像はより立体的になるであろう。

4. 地域間比較を可能にする資料集としての価値

第四の意義は、全国各地の学力テスト関係資料を地域別に整理したことによって、比較研究の基盤を形成したことである。

本資料集は、北海道・東北、関東、北信越・東海、関西、中国・四国、九州・沖縄という地域的広がりをもつ。各巻では、採録した資料の性格、実施主体、年代、教科等が整理され、資料一覧が示されている。これにより、一つの地域の教育史を個別に研究だけでなく、地域間の共通性と差異を比較することが可能となる。

例えば、戦後早期から独自の標準学力検査を作成した地域と、後に全国的な学力調査や既存の標準検査の影響を受けて展開した地域を比較することができる。また、県教育研究所が中心となった地域、教育委員会が主導した地域、大学研究者や学校現場との連携が強かった地域など、開発主体の違いにも着目できる。

さらに、対象教科、対象学年、実施頻度、問題形式、結果の利用方法を比較することによって、日本における教育評価の標準化がどのように進んだのか、逆に地域固有の教育課題や教育文化がどの程度維持されたのかを検討できる。

この比較可能性は、本資料集の重要な価値である。地方教育史の集積が、そのまま全国史になるわけではない。しかし、各地域の一次資料を共通の問題関心の下に並べることによって、中央

と地方、標準化と地域的自律性、共通性と多様性という軸から戦後日本の教育評価史を再構成する条件が整えられたのである。

5. 失われやすい教育資料を保存した資料学的意義

第五に、本資料集には資料保存という点で大きな学術的意義がある。

学力テスト関係資料の多くは、後世の歴史研究を想定して作成されたものではない。問題冊子、実施要項、教育研究所の報告書、教育委員会資料、学校の研究紀要等は、保存期間の終了、組織改編、施設移転等によって散逸する可能性が高い。特に地方教育行政や学校現場に残された資料は、国レベルの公文書と比較して体系的保存が難しい場合もある。

本資料集の編纂は、こうした資料を各地から探索し、収集し、整理し、研究者が参照可能な形で提示する作業でもあった。各巻には採録方針が示され、都道府県別の番号、テスト名称、教科、実施年、実施主体・資料の所在等を確認できる資料一覧が付されている。資料集としての透明性を確保しようとするこの構成は、今後の研究者が資料を追跡し、別資料と照合する際にも有用である。

歴史研究は一次資料が存在して初めて成立する。その意味で、本資料集は既存研究を整理した二次的成果であるだけではない。将来の研究そのものを可能にする「研究インフラ」を構築したものと位置づけることができる。

また、収録資料の中には一部欠落或不鮮明なものがあること、資料の残存状況に地域差があることも採録方針で明示されている。これは資料集の限界であると同時に、資料の保存状況そのものが戦後教育史研究の課題であることを示している。本資料集に収録されていないことが、その地域で学力テストが実施されなかったことを意味するわけではない。この点を踏まえた慎重な利用が求められる。

6. 各地域の解題が示す学力テストの多様な展開

本資料集の特徴は、資料を復刻するだけでなく、各地域における学力テストの開発・実施の特徴を解題として示していることである。

北海道・東北編では、戦後の各県における学力テストの展開が検討され、青森県・秋田県などでは戦後早期から県独自の学力テストが実施されたことが示される。また、県教育研究所等の設置と研究活動がテスト開発を支えた事例も確認される。ここからは、学力テストの普及が単なる外部技術の導入ではなく、地域の教育研究体制の形成と密接に関係していたことが分かる。

関東編では、茨城、栃木、千葉等の事例を通して、県教育研究所、教育委員会、大学等が関与した標準学力検査や学力調査の展開が示される。特に、戦後初期の教育研究活動の中で学力測定が重要な課題として位置づけられ、テスト結果を教育改善に利用しようとした点が注目される。

北信越・東海編では、富山県等における学力テストの展開から、地域の教育研究所や研究会が果たした役割が見えてくる。全国的な標準化の影響を受けながらも、地域の教育事情に応じた検査や調査が行われていたことは、戦後教育の多様性を示す。

関西編では、滋賀、大阪、京都、兵庫等の資料を通して、教育研究所等による標準学力検査、学力調査の開発が検討されている。解題では、学力低下への問題意識、教育課程や指導法の改善、児童・生徒の実態把握といった複数の目的が交差していたことが示される。

中国・四国編では、岡山県をはじめとする各県の資料から、県独自の標準学力検査の作成、全国調査との比較、学習指導改善への活用などが確認できる。岡山県の事例では、標準学力検査の作成に際して、その目的や特色が具体的に示されており、地域独自の測定実践が相当な組織性をもって行われていたことが分かる。

このように各巻を横断すると、「戦後学力テスト」という一語では捉えきれない地域差が浮かび上がる。いつ始まったのか、誰が作ったのか、何を測ったのか、何のために結果を使ったのか。その組み合わせは地域によって異なる。本資料集の解題は、資料の案内であると同時に、こうした比較研究のための仮説を提示する役割を果たしている。

7. 戦後教育史と現代の教育評価研究を接続する可能性

本資料集の意義は、過去のエ育史を明らかにすることだけに限定されない。

現在、教育分野では、学力調査、教育データ、エビデンスに基づく教育政策等への関心が高まっている。児童・生徒の学力をどのように測定するのか、測定結果をどのように解釈するのか、学校間・地域間の比較にどのような意味があるのか、結果を授業改善や教育政策へどのようにつなげるのかという問題は、今日も教育評価の中心的課題である。

本資料集が示すのは、これらの問いには長い歴史があるということである。戦後の教育関係者もまた、学力とは何か、何を測定すべきか、客観性や標準性をどのように確保するのか、結果を教育改善へどのように還元するのかという問題に向き合ってきた。

この歴史を振り返ることによって、現在の学力調査を所与の制度として見るのではなく、その目的と方法を歴史的に相対化できる。学力を数値化することで何が見えるのか。一方で何が見えにくくなるのか。地域間比較は教育改善にどのように役立ち、どのような問題を生じさせ得るのか。測定結果を教育実践へ還元するにはどのような条件が必要なのか。これらは現在だけの問題ではない。

したがって、本資料集は戦後教育史の資料であると同時に、現代の教育評価を考えるための歴史的参照点でもある。過去の実践を現在の制度の単純な先駆として評価するのではなく、過去にどのような選択肢があり、何が継承され、何が失われたのかを検討することが重要である。

8. 本資料集の限界と、そこから開かれる研究課題

書評としては、本資料集の意義とともに、その限界についても確認しておく必要がある。

第一に、資料の残存状況に地域差がある。編者自身が採録方針で示しているように、一部欠落、不鮮明、所在不明等の資料が存在する。したがって、収録点数の多少をそのまま各地域の学力テスト活動の盛衰とみなすことはできない。

第二に、資料集に収録されるのは、基本的に現時点で発見・収集できた資料である。学校単位、市町村単位、民間機関等によるテストには、なお未発見のものが存在する可能性がある。本資料集は網羅性を目指す重要な成果であるが、同時にさらなる資料探索を促す出発点でもある。

第三に、テストの制度的目的と学校現場における実際の利用との間には距離があり得る。報告書上は「指導改善」を掲げていても、それが教師の授業実践にどの程度影響したのかは、別の史料や聞き取り等による検証が必要である。

しかし、これらは本資料集の価値を損なうものではない。むしろ、資料の所在と欠落を可視化し、次に何を調べるべきかを示した点にこそ資料集としての価値がある。

今後の研究課題として、第一に地域間比較が挙げられる。各地域の共通性と独自性を、時期、実施主体、目的、教科、対象学年、測定方法等の観点から体系的に比較する必要がある。

第二に、テスト問題そのものの内容分析である。出題内容や問題形式の変化を追跡することで、各時代における「望ましい学力」の構造をより具体的に明らかにできる。

第三に、学力テストの結果が教育行政や学校現場でどのように利用されたのかを追究する必要がある。会議録、指導資料、学校の研究紀要等と照合することで、「測定―分析―改善」の実態が見えてくる可能性がある。

第四に、教育研究所、教育委員会、大学研究者、学校教員等の人的ネットワークの研究である。戦後日本に教育測定・教育評価の知識や技術がどのように導入され、各地域へ伝播し、地域の実践の中で変容したのかを明らかにすることは、教育学史・教育行政史の双方にとって重要な課題となる。

つまり、本資料集は研究の「結論」を与えるものというより、これまで見えていなかった研究対象を可視化し、新たな問いを生み出す資料集なのである。

おわりに

北野秋男編著『戦後学力テスト研究資料集』第1巻～第6巻の最大の学術的意義は、戦後日本における学力テストの歴史を、全国規模の教育政策や著名な学力調査だけから説明するのではなく、各都道府県・地域で展開された多様な学力評価の実践を含む歴史として再構成するための資料的基盤を築いたことにある。

本資料集から浮かび上がるのは、一つの「学力テスト」の歴史ではない。それぞれの地域、それぞれの時代において、教育関係者が「学力とは何か」「何を測るべきか」「どのような方法で測るのか」「その結果を教育にどう生かすのか」という問いに向き合ってきた歴史である。

また、本資料集は、戦後教育史、教育評価史、教育方法史、地方教育行政史等、複数の研究領域を架橋する可能性を有している。全国的政策と地域の実践、標準化と地域的独自性、測定と教育改善という複数の視点から戦後教育を読み直すことができるからである。

さらに、各地に散在し、将来的には散逸する可能性のあった学力テスト関係資料を収集し、研究利用可能な形で残したことの意義は大きい。資料を保存することは、将来の研究可能性を保存することでもある。

一方、本資料集によって戦後学力テスト研究が完結したわけではない。地域間比較、テスト内容の分析、結果の教育的利用、開発主体間の人的ネットワークなど、本資料集を基礎として検討すべき課題は数多く残されている。

この意味において、『戦後学力テスト研究資料集』第1巻～第6巻は、戦後学力テストに関する過去の資料を集めた「資料集」であると同時に、これからの戦後教育研究を生み出すための基盤となる研究成果である。その資料的価値と研究上の広がりの方々に、本資料集の学術的意義があると評価したい。